

研究課題 : かかりつけ歯科医師の存在とその後の QOL、生存維持との因果構造

研究者名 : 星 旦二 1) 矢吹義秀 2) 小林憲司 2) 福澤洋一 2) 谷村秀樹 2) 古藤真実 2) 長井博昭 2) 西辻直之 2) 和田奈都野 2) 牧野寛 2) 中曽根隆一 2) 木村 充 2) 田野ルミ 3) 井上和男 4)

所属 : 1) 首都大学東京・都市環境学部, 2) (公社)東京都港区芝 歯科医師会, 3) 埼玉県立大学・保健医療福祉学部, 4) 帝京大学ちば総合医療センター地域医療学

【研究概要】

研究目的は、歯科医院を受診した人を対象として、予防を重視した受診行動と、口腔衛生状態が主観的健康感と生活満足感を高め、その七年後の生存とどのような構造的な因果構造が見られるのかを明確にすることである。

【研究方法と研究内容】

調査方法は、東京都港区芝 歯科医師会に所属する 42 歯科医院において、2008 年 1 月から 3 月までに受診した 2,900 名を対象とし、自記式質問紙調査と歯科医師による口腔内診査を行った。そのうち有効回答の得られた 2,745 名 (94.7%) を本研究の分析対象とした。その後、2015 年 3 月 31 日までの生存を歯科医院の受診状況を基にして明確にした。

自記式質問紙の調査項目は、性、年齢、主観的健康感、生活満足感、歯間清掃用具の使用状況とした。歯科医師による口腔内診査は、現在歯数、口腔清掃状態、歯肉状態とし、定期受診状況を判断した。対象群を受診動機が定期的、そして予防重視別に分類した。

【結論と研究課題】

口腔清掃状態と歯肉状態は、歯間清掃用具と予防受診に規定され、同時に、主観的健康感と生活満足感の維持に関連していた。

本研究では、歯科医院を予防目的で定期的に受診する行動は、口腔衛生状態を望ましくすると共に、食の豊かさを経て、主観的健康感や生活満足度と関連する QOL を維持増進させている可能性があり、最終的には、生存維持と生存日数の延伸に関連する因果構造が示された。

今後の研究課題としては、最終効果である生存維持と生存日数の決定係数は小さい値であったことから、追跡期間を延長させた分析解析が必要である事が明らかとなった。